

父の刀と蓄音器

宇敷 辰男

一九九九年に七十七歳で亡くなった父の往年使った刀と蓄音器が我家に残っている。

蓄音器はゼンマイ式で蓋の裏に「日本ビクター蓄音器株式会社」フイライ「V-VI-80」[Victrola]と書いてある。私の物心がついた時は電蓄の時代で、その後ステレオからオーディオセットへと移り変わり、蓄音器は片隅に追いやられていった。

一周忌に父の親友や同僚の皆さんにも参列いただき偲ぶ会を催した。中学の友人ツーちゃんや野球仲間のマー公さんから、四谷の杉大門通りに在った父の実家の二階で戦時中に布団を被って蓄音器を聴いた話が出た。昭和十八年十月学徒動員の時に神宮外苑の出陣式が嫌だったので家で蓄音器を聴いていた話は父から聞いていた。昭和二十年五月、東京山の手を襲った空襲で四谷にも焼夷弾が降りそそぐ中、マー公さんがその蓄音器を抱えて防空壕へ避難し戦火を逃れた話を初めて聞いた。終戦でツーちゃんがビルマから生還し、父が皇居警衛の近衛師団から戻り、友が再会した思い出話にも花が咲いた。

その後父の長兄が他界し軍刀を保管していた連絡が従兄からあった。父が学徒出陣した時、代々実家に伝わる日本刀を軍刀に仕立て直して身に付けた刀が、三回忌に戻って来た。都の刀剣類登録審査会に届け出て美術品として交付された銃砲刀剣類登録証には「長さ六九・六^セ、反り一・八^セ、銘文…直信」と書いてある。古いアルバムにゲートルを巻き軍刀を携えた若き日の写真が残っている。皇居で防空壕を掘っていた時、天皇陛下ご来臨に慌てて父が号令を掛け敬礼した話を聞いたことがある。

戦時中の詳しいことを父が語ることは少なかったが、敗戦を告げる玉音放送の秘話を描いた「日本のいちばん長い日」が昭和四十二年に映画化されロードショーと一緒に観た時「そういうことだったのか」とつぶやいた事を憶えている。

弔問の客には大いに酒を振る舞うよう言っていた父なので、今は向こうで賑やかに当時の仲間とゆっくり杯を傾けている様子が目に浮かぶ。